教養と社会班 解題と文献リスト報告

はじめに

教養と社会班は、「戦後日本の一般教育論において市民に求められる「科学」がどのように理解され、 位置づけられてきたのか」という問いを立て、文献の収集および重要文献の解題を作成した。収集した文献は、①日本の一般教育論および科学教育論、②リベラル・エデュケーション、ジェネラル・エデュケーションにおける科学論、③政治哲学におけるシティズンシップ論などの三つに分類した。

以下では、分類ごとの重要文献の解題と、その他の文献リストを報告する。

① 日本の一般教育論および科学教育論

●戸坂潤「教育風俗」『思想と風俗』1936、三笠書房、147-310頁。

本書は、戸坂が当時の教養の観念に否定的であり、新たな教養を提起していると考えられる ために取り上げる。

戸坂は、社会現象(「風俗」)は思想の表現であるという認識のもと、当時の社会現象を考察した。戸坂は、有閑層の階級的洗練としての教養や、大学を卒業したことで身についたとされる教養は「階級的固定観念や伝統的な好みのマンネリズム」に基づくものであり「真の教養」ではないとして、民衆のための「新しい型の教養」を提起する。しかし新たな教養を具体的に表現することはできないため、それがどのようなものかを考える際に、教養が欠けている状態を想定し、「関心、興味の範囲が狭小」であることや、「関心興味の偏頗であること」を挙げる。そして、関心や興味を決定するのが「教養といふ一つの規範」であるとし、教養の有無は、それぞれが持つ関心の対象によってはかることができるとする。そして、教養は教育されて身につくものであると述べるが、それは学校教育ではなく「民衆における啓蒙活動」によってなされるべきだと主張した。

●玉蟲文一「教養としての自然科学」竹内富子編『学生のための教養』三笠書房、1940、 147-160 頁。

本書は、戦前において科学的思考がどう語られていたのかを、戦後も積極的に発言した人物 からみるために取り上げる。

玉虫は科学教育の重要性を説くが、それは単なる科学の知識を教えることではなく、科学の一般的方法の方法を教えることを通して、「探求的理論的」な思考を育成することだという。本書は学生向けの叢書だが、理系の学生だけではなく、「自然科学的教養は万人のためのもの」として、文系の学生や一般国民にもそうした思考が必要であるとする。戦後は「市民のため」と表現されるようになるが、国民全体に共有されるべきであるという主張は一貫している。また「一般的国民的教養」としての自然科学が国民に必要であるとされるのは国家の発展、国力の維持のためであったが、これは戦時下という状況を反映していると思われる。

●玉虫文一『科学と一般教育』岩波書店、1952年。

戦後、大学教育基準協会に関係した著者が、科学との関係に焦点を当てて、一般教育の理念を提示した書籍。一般教育を、市民のための教育、「より良い協同社会の建設」のための教育と位置づけ、青年を「理性をもって行動し、公正な判断力をもち、人間文化の建設のために他人と協力する態度をそなえた人間」に育てる必要性を主張している。なお一般教育の理念や方法を提示するにあたって、旧制高校における教育とは理念・方法とは異なるものと位置づけている。

一般教育における科学の役割については、学生に科学の体系的知識を与えたり多くの専門的技術を教える目的ではなく、主として「科学的に思考することの方法」を理解させることに意義があるとしている。なぜなら、論理と実証によって裏付けられる典型的な科学の方法を教えられるものとして自然科学に変わるべきものはない、と考えるためである。つまり科学者や技術者を養成するためのものとして計画されてきた「従来の科学教育」に対して、一般教育における科学は、非専門学生のために、科学的方法の習得を目指して計画されなければならない、と主張している。

●大田堯・川合章(1961)「科学と教育」

『岩波講座 現代教育学 4 近代の教育思想』岩波書店、127-151 頁

1960 年から 1961 年にかけて刊行された『岩波講座 現代教育学』(全 18 巻) の第 4 巻に収録されたもの。

本章では、自然科学と教育の関係性およびその展開を、ベーコンから、コメニウス、コンドルセ、ベンサム、ディーステルヴェーク、ハックスレーへと辿りながら論じている。

本章において通底するのは、科学を既成の道徳・宗教的価値と対置させ、一般的・普遍的な法則に到達するための手段として捉える視点である。本章によれば、「一人一人に共通に要求される知識の成立は、おそらく自然科学の発展を前提にしてはじめて可能であった」(147頁)。科学とは「特殊」から「一般」を導き出すものであり、その意味で科学によって導出された知識は普遍性を有するとされる。これに対し、「本質的に非科学的な宗教教育、神秘的な歴史教育、あるいは資本主義的なモラルに立つ社会的な考え方の注入など」は、「科学教育の発展を大きく制約してきた」ものであるという。

本章には「教養」に関する言及はあまりないが、以上のように、道徳や宗教など、価値に関する教育(本章では「訓育」や「教化」などと言われる)に相対するものとして科学教育の重要性を主張している点は、当時の教育学を代表する立場の科学観が現れている資料として検討に値すると思われる。

ところで、『自然科学と教育』(第 10 巻)と銘打つ号がある本シリーズとは対照的に、1952 年に刊行された『岩波講座 教育』には、科学に関する項目が無い。この差異にはスプートニク・ショックの影響など様々な社会的要因が考えられるが、そういった背景をふまえつつ両シリーズの比較検討を行うことで、1960 年代の科学教育観の考察が深められるかもしれない。

● 『岩波講座 現代教育学 10 自然科学と教育』岩波書店、1961 年 (特に、玉虫文一・田中実・富山小太郎「科学教育の基礎」2-43 頁)

本書は上に挙げた「近代の教育思想」と同じ『岩波講座 現代教育学』シリーズのひとつであるが、前書が道徳や宗教など価値に関する教育と対置させて科学教育を肯定的に論じていたのに対し、本書ではそうした観点からの言及はほとんどみられず、科学教育のあり方そのものを問うている点にその特徴があるといえる。特に、「政治的判断の基礎知識」として「科学的知識」を位置づけ、さらには「自然にたいしても社会にたいしても共通する、判断と行動の基本形式を獲得させる」(22 頁)こと¹も科学教育の重要な目標のひとつとして挙げられていることは、班のテーマ的にも重要である。

このように本書は、同じ「岩波講座」における議論も決して一枚岩的ではなく、「科学教育」 をめぐって多様な立場や論点が提示されていたことを示すものとして、検討すべきものと考え られる²。

●吉村融「一般教育」清水義弘編著『<教育学叢書第 7 巻>日本の高等教育』第一法規出版、1968 年

日本の「体質的欠陥」(西欧文明を導入する中で「日本の知識人が西欧的教養に対する"誤った理解"から生じた、"精神の貧困"」等の問題)と一般教育が強く関連づけているという立場から、大学における一般教育の問題及び問題改善の戦略が論じされたものであるため、本書を挙げる。

本書によれば、今までの一般教育の理念は「長い大学制度の歴史のなかで培われた理念の過去からの遺産」であり、それらは「人類の未熟の情報処理過程の残滓が雑然と混在している」という(132 頁)。さらに、専門教育対教養教育、科学対人文学という論争の形骸化を批判し、現代と未来を重点に置き、学問の専門分化とそれを統合する思考を調整するため、「創造的知性の基礎となるような思考の回路網の設定」が必要であると主張している(138 頁)。

埋なものかある。事物の異同、位置的・時間的関係、因果関係を判断するには対象の特質を超えた論理か使われる。論理学はそうした思考の型の存在を前提として成立している。[・・・] 実験、観察、製作など、自然への身体的なはたらきかけをともなう活動が、対象の論理に合致した行動をする能力を得させることにも、期待をかけてよいだろう。」(41頁)

^{1 「}人々を年少の時から自然科学に親しませ、科学の社会的適用について公共的立場から善悪を判断する 敏感さを養うことは、将来の社会成員の政治的判断を改造することに大いに役立つであろう。」(24頁) 「対象が自然現象であろうと社会現象であろうと、それについてなんらかの判断を下す思考の方には、共 通なものがある。事物の異同、位置的・時間的関係、因果関係を判断するには対象の特質を超えた論理が はたれる。

[「]自然科学の社会的機能を認識し、また自然科学的判断の可能な限りで、できるだけ社会現象を判断することは(例えば迷信、人種差別)、前に述べたとおり、現代社会ではきわめて重要なことである。」(42 頁) ² 高等教育との関連については、玉虫文一によるアメリカ教育使節団に対する以下の評価が興味深い。「日本で戦後の教育改革が行われるに先立ってアメリカ合衆国から日本の教育事情を査察に来た一団の人々は、その報告書の中で、日本の過去の高等教育において、教育の内容や方法があまりに専門化・職業化されすぎ、人文学的教養が欠けていたことを指摘し、さらに国民の科学教育は単に技術や産業の向上に役立つばかりでなく、国民の性格の形成に役立つよう行われなければならないという意味の勧告を行なった。これに対しては日本の教育者・科学者の間に反論があったかもしれないが、冷静に考えて、それは十分に傾聴すべきものをふくんでいたといわなければならない。」(16 頁)

●五十嵐顕編『現代社会と教育』(講座現代民主主義教育第一巻)、青木書店、1970年

本書は、民主主義の視点から、小中高段階と高等教育段階を分けて科学教育を捉えている。ここでは、歴史的に科学教育を解読していた第五章の第二節「科学・技術の発展と民主教育」を 重点に置く解題を作りたい。

佐々木享・原正敏は「歴史的事実が示すところによれば、教育が国家統制のもとにおかれるときは、国民教育としての科学教育の健全な発達を期待することはできず、科学と教育との関係を遠ざけてしまう」(374 頁)と述べている。さらに、20世紀50、60年代頃の高校教育の中でも学生の進路によって異なる科学教育を行うというような「差別と選別」の状況を激しく批判した。

●日本学術会議「提言 21 世紀の教養と教養教育」(平成 22 年 4 月 5 日)

社会班は、日本学術会議(日本の展望委員会・知の創造分科会)「提言:21世紀の教養と教養教育」(平成22年4月5日)において、我々がテーマとして掲げる「市民」や「科学的態度」といったのもがどのように語られているのかをみるために本解題を作成し、併せてこれらの提言が出されるまでの教養教育に関わる提言内容の変遷をまとめる。

【本分科会の検討課題】

- ◆中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて(審議のまとめ)」(平成 20 年 3 月 25 日)
- ◆文科省が、日本学術会議に対して大学教育の分野別質保証の在り方に関する審議を依頼。
- ◆大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会設置(平成 20 年 6 月 26 日)。
 - ・ 質保証枠組み検討分科会
 - 大学と職業との接続検討分科会
 - ・教養教育・共通教育検討分科会(平成21年1月22日) ←検討課題共通。
 - →委員は両分科会を兼任し、審議検討も両分科会合同で実施。以下の諸点を中心に検討。

◇大学改革の展開と教養教育の変遷、大衆化・多様化した大学・学生の現状と大学教育の役割、高度化・専門分化が進む学問・研究の現状および大学における教養教育と専門教育の関係、1991年の大学設置基準大綱化以降の教養教育の展開と現在の課題、現代社会における教養の意義と教養教育に期待されるもの、大学教育の分野別質保証と共通教育・教養教育の課題など。

◆「教養」・「市民」に関する言及

◇近年の答申等の議論は、戦後間もなくの教養教育をめぐる議論とは異なるニュアンスを強めてきている。

・教養教育の究極目標とされていた「民主的社会」とその豊かな展開を担う「民主的市民」の育成。

・より<u>実践的・実用的な観点が重視され、教養の中身を構成する知識や能力が重視</u>される。 それは、「学士力」「社会人基礎力」「汎用的スキル(generic skills)」などの概念・考え方に。

◇21 世紀に期待される教養

「現代世界が経験している諸変化の特性を理解し、突きつけられている問題や課題について 考え探究し、それらの問題や課題の解明・解決に取り組んでいくことのできる知性・智恵・ 実践的能力」

⇒その多面的・重層的な知性・智恵・能力を、学問知、技法知、実践知という三つの知と市 民的教養を核とするものとして捉えている。



「現代の大学には、学問知・技法知・実践知という三カテゴリーの知と市民的教養を豊かなものとして育むこと、そして、そのための豊かな学びの機会と諸活動の場を提供することが求められる。」と提言している。

本提言においては、科学的な態度や科学的思考についての具体的な記述はされていなかったが、教養教育の中身を構成する知識や能力が重視されるなど、より実践的・実用的な観点が重視されてきていることがわかる。

【教養教育に関わる提言内容の変遷】

2002 中教審答申「新しい時代における教養教育の在り方について」

教養教育は、学生にグローバル化や科学技術の進展など社会の激しい変化に対応し得る統合 された知の基盤を与えるものでなければならない、とする。

2005 中教審答申「我が国の高等教育の将来像」

知識基盤社会(knowledge-based society)を前提にしたうえで・・・

「知識基盤社会」においては、新たな知の創造・継承・活用が社会の発展の基盤となり、そのため、高等教育における教育機能を充実し、先見性・創造性・独創性に富み卓越した指導的人材を幅広い分野で養成・確保することが重要である、とする。

2008 中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」

「将来像」答申の認識と提言を推し進め、「学士力」という概念を提起し、「21世紀型市民³にふさわしい学習成果」すなわち「分野横断的に、我が国の学士課程教育が共通して目指す学習成

³専攻分野についての専門性を有するだけでなく、幅広い教養を身に付け、高い公共性・倫理性を保持しつつ、時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、あるいは社会を改善していく資質を有する人材。

果」の達成を担保する必要があるとして、「各専攻分野を通して培う学士力―学士課程共通の学習成果に関する参考指針―」を提示している。

【学士力に関する参考指針】(2008 中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」)

1. 知識•理解

専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解(多文化の異文化に関する知識の理解、人類の文化・社会と自然に関する知識の理解)

2. 汎用的技能

知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能(コミュニケーション・スキル、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力)

3. 態度・志向性

自己管理力、チームワーク・リーダーシップ、倫理観、市民としての社会的責任、生涯学習力

4. 統合的な学習経験と創造的思考力 自らが立てた新たな課題を解決する能力

●その他文献リスト

- ・池内房吉「公民教育と國民教育」『學習研究』 12(1)、1933、266-71 頁
- ・ 谷川徹三「教養と文学の世界」『中央公論』1936.8
- ・ 三木清「教養論の現実的意義」『改造』1937.4
- ・田中耕太郎『教養と文化の基礎』岩波書店, 1937.6
- ・河合栄治郎「自然科学の学生と教養 ―東京帝国大学医学部学生に対して」1937 年 (『河合栄治郎全集 第17巻』収録1968 年、63~85 頁。)
- ・清水幾太郎「常識・良識・知識」『中央公論』1938.4
- ・中野好夫「読書と教養」竹内富子編『現代の教養』三笠書房、1939
- ・ 恒藤恭「現代の教養」竹内富子編『現代の教養』三笠書房、1939
- ・清水幾太郎「常識と科学」竹内富子編『現代の教養』三笠書房、1939
- ・ 谷川徹三「新しき教養について」『婦人公論』1939.6
- ・ 清水幾太郎「教養と科学」『セルパン』105号、1939.10
- ・ 清水幾太郎「学生と知識習得」竹内富子編『学生のための教養』(学生教養講座第一巻)三笠書房、1940
- ・ 玉虫文一「教養としての自然科学」竹内富子編『学生のための教養』三笠書房、1940
- ・河上徹太郎『道徳と教養』實業之日本社,1940.7
- ・安倍能成『青年と教養』岩波書店, 1940.11
- ・佐藤得二『国民的教養の出發』那珂書店、1942.10
- ・河合栄治郎「科学への考察」『学窓記』1948年(『河合栄治郎全集第18巻』再録1968年、142~164頁)
- ・大学基準協会一般教育研究委員会「大学に於ける一般教育」『大学基準協会資料』第6号、1949年。
- ・民主教育協会大学一般教育研究会『大学における一般教育』第2集、民主教育協会、1957

- ・玉虫文一「一般教育をめぐる大学の問題」大学基準協会創立十周年記念論文集編集委員会編『新制大学 の諸問題』1957年。
- ·大学基準協会『大学基準協会十年史』1957年。
- ・南原繁「科学と人間形成」(1947年演説)『文化と国家』東京大学出版会、1957年。
- ・『岩波講座 現代教育学 1 現代の教育哲学』岩波書店、1960
- ・『岩波講座 現代教育学2 教育学概論 I』岩波書店、1960
- ・『岩波講座 現代教育学 12 社会科学と教育 I』岩波書店、1961
- ・石本新「二つの社会科学--文学的社会科学と科学的社会科学」『思想の科学』第4次、1961
- ・磯村英一・諸井三郎・平井金吾『これからの社会人』Vol. 1、全日本社会教育連合会、1963
- ・滝沢武久「子どもの思考体制の発展と社会科学的認識」『教育』 13(1)、1963、31-9 頁
- ・森戸辰男「大学の使命について」『文部時報』 (10)、1965
- ・堀尾輝久「国民教育における「教養」をめぐる問題」『思想』 (12)、1967、1-18 頁
- ・玉虫文一「科学教育の問題」『思想』12、岩波書店、1967、131-138 頁⁴
- ・民主主義研究会『デモクラシー市民社会の形成過程における大学問題の在り方: 一般学生のための価値 観・世界観と史観』、民主主義研究会、1969
- ・矢部秀一「「上から」の教養ムードと「下から」の文化運動--第8回国民文化全国集会を機会に」『月刊 社会党』 (01)、1967、151-8 頁
- ・臼井吉見『現代の教養.』第16版(日本の ヴィジョン)筑摩書房、1968。
- ・馬場四郎「新しい『公民像』の成立と形成」『現代教育科学』第12巻第8号、明治図書出版、1969、24-29 頁。
- ・亀山健吉「大学における教養の問題」『理想』(通号430)、理想社、1969、29-42頁。
- ・碓井正久他「国民教育と教養」『教育』第19巻第6号、国土社、1969、p6-23頁。
- ・秋間実「社会主義への移行と教養の問題 (現代の教養)」『理想』 (03)、1969、19-28 頁
- ・「国民教育と教養(特集)」『教育』 19(6)(05)、1969、 6-30 頁
- ・特集「現代の教養」『理想』No. 430、理想社、1969年
- ・伊藤俊太郎「大学における一般教育」『思想』550 号、岩波書店、1970、pp. 109-113
- ・国立大学協会教養課程に関する特別委員会「大学における一般教育と教養課程の改善について(昭和 44 年 11 月)」. 『大学資料』 (02)、1970、78-84 頁
- ·梅根悟『大学教育論』誠文堂新光社、1970。
- ・寺崎昌男編『戦後の大学論』評論社、1970。
- ・国立大学協会教養課程に関する特別委員会「大学における一般教育と教養課程の改善について」『大学資料』(通号34) 文教協会、1970、78-84 頁。
- ・寺崎昌男編『戦後の大学論』評論社、1970年。

⁴ 「「期待される人間像」を受けて・・・〕

[「]もし現代のそのような混乱と混迷は科学や技術の発展の結果によるものであるならば、それを正しく方向づけるものは、何よりもまずその複雑な状況自体を十分に解析し、その本質を見極めることのできるような人間の理性ではないだろうか。つまり、科学的思考以外のものではないのではなかろうか。もちろん、筆者は科学的思考のみが有用であるというのではない。ただ、問題は旧来の倫理と道徳の復活によって解決されるものではないことを指摘したいのである。」(138)

- ・南原繁・堀尾輝久・寺崎昌男『戦後大学改革を語る: 一般教育を中心に』東京大学教養部一般教育研究 センター、1971
- ・伊藤恒夫「昭和初期の大学論」『松山商大論集』第21巻、第6号、1971
- ・伊藤恒夫「大学における『一般教育』と新らしい『教養』」『松山商大論集』第24巻第3、4号、松山商 科大学商経研究会、1973、19-47頁。
- ・笠原皓司「一般教育の理念と問題点」『IDE 現代の高等教育』145 号、民主教育協会、1974、5-11 頁
- ・宇田川宏「堀尾論文についての若干の解説 (国民的教養と子ども・青年の発達--第 15 回教科研全国大会へむけて)」『教育』 26 (9) (08)、1976、36-37 頁
- ・「国民的教養と子ども・青年の発達--第 15 回教科研全国大会へむけて」 1976.『教育』 26 (9) (08)、1976、8-93 百
- ・竹内峰「大学における一般教育と専門教育」『国民教育』 (通号 34) 、構造社、1977、88-107 頁。
- ・森川俊夫「『一般教育』私論」『一橋論叢』第79巻第2号、日本評論社、1978、233-245頁。
- ・田中実『思想としての科学教育』大月書店、1978。
- ・船山謙次「国民的教養の基礎としての学力とは--今日の学力問題の意味するもの(教育研究の課題)」.『現 代教育科学』21(10)(09)、1978、73-81頁
- ・松尾一徳『教養の教育学』北大路書房、1979。
- ・天野郁夫「大学と教養——何が問題とされているのか」『IDE現代の高等教育』No.370、民主教育協会、1995、5-14頁。
- ・寺崎昌男「大学改革と教養教育―再創造と保障への視点―」『教育学研究』66巻4号、1999、386-394頁。
- ・関正夫『21世紀の大学像』玉川大学出版、2000。
- ・寺崎昌男『大学教育の可能性―教養教育・評価・実践―』東信堂、 2002。
- ・松浦良充「戦後大学の『教育』化 —遅れてやってきた近代化」森田尚人・森田伸子・今井康雄編『教育と政治 —戦後教育史を読みなおす』勁草書房、2003 年、167~194 頁。
- ・絹川正吉、舘昭編著『学士課程教育の改革』東信堂、2004。
- ・絹川正吉『大学教育の思想:学士課程教育のデザイン』東信堂、2004。
- ・大学教育学会『新しい教養教育をめざして-大学教育学会25年の歩み-未来への提言』東信堂、2004。
- ・寺崎昌男『大学改革その先を読む』東信堂、2007。
- ・飯吉弘子「「21世紀型」教養教育の再検討―日米比較と産業界要求・教育実践の視点から―」『教育学研究』76巻4号、2009、438-451頁。
- ・渡辺かよ子『近現代日本の教養論』行路社、1997
- ・渡辺かよ子「1930年代の教養論の変容に関する試論的考察」『愛知淑徳大学論集 コミュニケーション 学部・コミュニケーション研究科篇 (1) 』 愛知淑徳大学、2001
- ・寺崎昌男『大学教育の可能性―教養教育・評価・実践―』東信堂、 2002。
- ・絹川正吉、舘昭編著『学士課程教育の改革』東信堂、2004。
- ・絹川正吉『大学教育の思想:学士課程教育のデザイン』東信堂、2004。
- ・大学教育学会『新しい教養教育をめざして-大学教育学会25年の歩み-未来への提言』東信堂、2004。
- ・寺崎昌男『大学改革その先を読む』東信堂、2007。
- ・飯吉弘子「「21世紀型」教養教育の再検討―日米比較と産業界要求・教育実践の視点から―」『教育学

研究』76巻4号、2009、438-451頁。

- ・藤田英典「現代の教養と教養教育の課題」『大阪市立大学大学教育』8巻1号、2010、21-29頁。
- ・小池聖一「森戸辰男の一般教育観」『広島大学文書館紀要』(14)、2012、1-17 頁 (答申)
- ・大学審議会『大学教育の改善について』(答申)1991年。
- ・大学審議会『高等教育の一層の改善について』(答申)1997年。
- ・大学審議会『二十一世紀の大学像と今後の改革方策について』(答申)1998年。
- ・大学審議会『グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について』(答申)2000年。
- ・中央教育審議会『新しい時代における教養教育の在り方について』(答申)2002年。
- ・中央教育審議会『我が国の高等教育の将来像』(答申)2005年。
- ・中央教育審議会『学士課程教育の構築に向けて』(答申)2008年。
- ・日本学術会議『回答:大学教育の分野別質保証の在り方について』2010年。

② リベラル・エデュケーション、ジェネラル・エデュケーションにおける科学論

●T・ハックスリー『自由教育・科学教育』明治図書出版、1966。

liberal education に自然科学を取り入れることの必要性を主張したハックスリーによる liberal education 論をまとめた著作。「1. 自由教育」においては、リベラル・エデュケイションが、大学教育のみならず、初等、中等においても重視されるべき理念として提示されている。古典研究についての一定の理解を示しつつも、「古典が現代人の自由教育の基礎となるなどということは、適切ではないと考えるのである」とする立場から、科学の重要性を指摘する。ハックスリーは、「知性に大自然の法則を教えること」を教育の重要な役割とみなし、古代ギリシアやローマの古典の読解は、形式と規則の暗記に基づいており、古典の美しさを味わう余力を学生に与えていないといった問題を抱えていると指摘する。

「3. 科学と教養」においては、liberal education に自然科学を導入することへの批判勢力として、実用主義と古典学者を挙げ、古典学者の代表としてアーノルドへの批判を展開している。自然に関する知識が、日々の生活に影響を与えていることを指摘し、理論を重視しそれに基づき批判的な判断力を与えることができるのは文学だけではない、と、自然科学の可能性を擁護する。なお、ハックスリーは、liberal を「幅広さ」という意味での自由と、どんな職業にでもつく可能性をもつこと、そしてそれに伴う義務への準備ができていること、そういう意味で自由人のための「自由」の二つの意味を込めて、liberal education を理解している。

●W.B.カーノカン著(丹治めぐみ訳)『カリキュラム論争 アメリカー般教育の歴史』玉川 大学出版部、1996 年

現在のアメリカの大学のカリキュラムに関する論争に問題意識を抱き、アメリカの大学における一般教育を、アメリカに固有の歴史や文化の所産という見地から歴史的に検証している。 ここでは、イギリスでの「書物戦争」およびアメリカでの一般教育に関する論争の様相につい

2014年9月26日(金)

報告:藤本、久保田、中村、廖、井上、田中

て記述する。

本書の検証のなかで中心に据えられているのは、ハーヴァード大学の学長を長く務めたチャールズ・ウィリアム・エリオットである。エリオットは、1986年から 1909年までの在任中、学生が自分の意思通りに履修できる自由選択制を導入するためにカリキュラムと闘い続けた人物であった。エリオットは、拡大する学問分野を制覇することが不可能であり、また学生には自主性をもつための訓練が必要であることから、カリキュラム選択に責任を持つことを求めたが、この考えにはダーヴィニズム、あるいは経済学的思考が入り込んでいた。これに対抗したのがプリンストン大学の学長ジェイムズ・マコッシュである。エリオットが自由市場としての大学を掲げたのに対し、マコッシュは「三位一体の学問」、言語学と文学・科学・哲学に関する相当の知識を持っているべきだと述べた。教養を広めるためのコミュニティとして大学を捉えたマコッシュは、古典に価値を置くオックスフォード大学や、数学教育を重視するケンブリッジ大学、またジョン・ヘンリー・ニューマンやマシュー・アーノルドに倣っている(第Ⅱ章)。

本書はアメリカの大学における一般教育の歴史的検証であるが、エリオットに反対するグループがよりどころにしていたニューマン、アーノルドに言及する。また、ニューマン、アーノルド以前にすでにあった、19世紀初頭のイギリスでの一般教育をめぐる「古典派」と「近代派」による論争に立ち返る。第Ⅲ章ではスコットランドの近代派とオックスフォード大学の古典派の間の「書物戦争」を描く。最初の議論は、学識・科学・実用性の主張に対する一般教育の擁護であったが、その 20 年後に起こった論争は一般教育の内容に関するもので、近代派にとって哲学は倫理的理解力を高め、世俗的知識を獲得する認識論的必須科目であった。さらに、ニューマン、アーノルド以前の最後の論争として挙げられているのは、専門別指導を行うべきとするチャールズ・ライエルと、多数の大学を対象とした一般教育を標榜したケンブリッジ大学のカレッジの学長であったウィリアム・ヒューエルのものである。これらの議論の後に登場したニューマンとアーノルドに関して、第Ⅳ章では、両者の相違が描かれる。ニューマンは、一般教育の目的は決して「人間をより善良にすること」ではなく、世界の世俗的な性質を学生が理解するためにあるとしていた。一方アーノルドは、「教養」に対する敬意を持ち、宗教上の違いを調和させる文化を信仰していた。

★教養と社会班は、日本の教養教育における科学的思考力を捉えるため、イギリスでの「書物戦争」およびアメリカでの一般教育に関する論争から枠組みを読み取り、比較教育学的視点を得るために本書の解題を作成した。

●その他文献リスト

- ・M・アーノルド『教養と無秩序』多田英次訳、岩波書店、1965 年。Arnold, M. *Culture and Anarchy*, Cambridge: The Cambridge University Press, 1932.
- ・扇谷尚『アメリカの諸大学における一般教育』 再版 ed. Vol. 第23 集民主教育協会、1965
- ・酒井康「アメリカにおける教養教育(Liberal Education)の思想-2-」同志社女子大学教育・研究推進センター編『同志社女子大学学術研究年報』(通号 19)、1968、355-369 頁。

- ・竹熊耕一「Matthew Arnold における「教養」の理念--その社会批判と教育論の基底として」『京都大学教育学部紀要』(通号 24)、京都大学教育学部、1978、234-245 頁。
- ・古橋和夫「文学と科学:アーノルドとハックスリ論争の再考」『研究紀要』第二分冊, 短期大学部(i) 25 、 1992、55-67 頁
- ・C・P・スノー『二つの文化と科学革命』松井巻之助訳、みすず書房、1967年。
- ・ヴィヴィアン・H・ グリーン『イギリスの大学―その歴史と生態』安原義仁・成定薫訳、法政大学出版 局、1994年。
- Kimball, B.A. Orators & Philosophers: A History of the Idea of Liberal Education (Expanded Edition), New York: College Entrance Examination Board, 1995.
- ・V・レペニース『三つの文化―仏・英・独の比較文化学』松家次朗・吉村健一・森良文訳、法政大学出版局、2002年。
- Trefil, J. "Science Education for Everyone: Why and What?" Liberal Education, 94(2), 2008, pp.6~11.

③ 政治哲学におけるシティズンシップ論など

●W. キムリッカ:千葉真、岡崎晴輝訳者代表『新版 現代政治理論』日本経済評論社、 2005

1980 年代以降における「市民論」をめぐる政治哲学的背景を、現代の政治理論とりわけ、リベラル・コミュニタリンに注目して探るため、『新版 現代政治理論』をもとに本解題を作成する。

【「共同体」について】

◇リベラル:共通の国民性、言語、アイデンティティ、文化、宗教、歴史、生活様式など、 共同体独自の原理を含まない。

・ある社会が共同体の理念どおりに形づくられているといえるのは社会の構成員が自由かつ 平等な人格として処遇される場合。

◇コミュニタリアリズム:自由や平等とともに共同体に対する注目の必要性を主張。リベラルな正議論やリベラルな社会の公共文化では<u>共同体の価値</u>が十分に認められていない、とする。

・共同体が共通の社会慣習、文化的伝統、共有された社会的了解のかたちですでに存在しているとした上で、共同体は、新たに構築されるのではなく、尊重され、保護される必要がある、と主張する。

【「自己」について】

◇リベラル:個人には<u>既存の社会慣習への参与を疑う自由</u>があり、その社会慣習が追求に値 しないものと思われるならば、<u>手を引く自由</u>がある。

◇コミュニタリアン:リベラルの自己観は、自己が既存の社会慣習のなかに<u>「埋め込まれている(embedded)」</u>、あるいは<u>「状況化されている(situated)」</u>という事実を無視しているという。また、社会慣習から離脱したり手を引いたりすることはいつでもできる訳ではないという事実を無視しているともいう。

→自己決定は、これらの社会的役割の内側で遂行されるものであり、外側で遂行されるもの ではない、のだという。

【シティズンシップ理論】

◇リベラルな個人主義とコミュニタリアニズムとの対立を乗り越え、リベラルな正義と共同体のメンバーシップの要求とを統合しようという試みがなされるようになった。ここで登場したのがシティズンシップという理念。

◇シティズンシップ:一方では個人の権利というリベラルな理念と、他方では特定の共同体に おけるメンバーシップや特定の共同体への愛着というコミュニタリアンの理念と密接に関連し ている。

⇒リベラルとコミュニタリアンの論争を媒介しうる概念を与えてくれるのだという。

●その他文献リスト

- Rorty, R. "Education, Socialization, and Individuation" Liberal Education, 75(4), 1989, pp.2~9.
- Nussbaum, M.C. Cultivating Humanity: A Classical Defense of Reform in Liberal Education, Cambridge: Harvard University Press, 1997.
- ・宮寺晃夫「教育学における教養: その拡充とリベラリズム哲学の関わり」『教育学研究』66巻3号、1999年、259-267頁。
- ・有賀 誠ほか編『ポスト・リベラリズム―社会的規範理論への招待』ナカニシヤ出版、2000年。
- ・ジェラード・デランティ『グローバル時代のシティズンシップ:新しい社会理論の地平』佐藤康行訳、 日本経済評論社、2004年。
- ・町田博『市民と政治社会』創成社、2004。
- ・平井悠介「グローバル化時代の市民教育とアイデンティティ: A・ガットマンの政治的教育理論に注目 して」『教育哲学の再構築』学問者、2006 年、25-37 頁。
- ・スティーヴン・ムルホール、アダム・スウィフト著:谷澤正嗣、飯島昇蔵訳者代表『リベラル・コミュニタリアン論争』勁草書房、2007。
- ・平井悠介「教育における国家的統合と価値としての政治的平等:1990年代アメリカのリベラル派の市民教育理論に焦点を当てて」『教育学研究』74巻4号、2007、530-541頁。
- ・Bauman, Z. Culture in a Liquid Modern World, Cambridge: Polity Press, 2011 (=『リキッド化する世界の文化論』伊藤茂訳、青土社、2014)
- White, M. "Higher Education and Problems of Citizenship Formation." *Journal of Philosophy of Education*, 47(1), 2013, pp.112~127.